

牛久：学校周辺に見る自然

第55号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年11月27日発行

＜ 秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～5. 秋に咲く花 ＞

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の生きもの観察。今回は、秋に咲いて花。冬を種子で乗り越えるために、花を咲かせる植物がその大部分ですが、本来、春や夏に花を咲かせる植物なのに、時期はずれの秋に花を咲かせてしまった、いわゆる「^{くるいざき}狂い咲き」の花もありました。



秋の空き地に咲くキク科のアキノノゲシ(左)とセイタカアワダチソウ(右)

まずは、秋を代表する花から。左はアキノノゲシ(秋の野ゲシ)。春に咲くノゲシやオキノゲシがありますが、だいぶ特徴が違っているので、区別できるでしょう(第3号, 22年度第5号参考)。

右はセイタカアワダチソウ。「^{ふうひょうひがい}風評被害」ということばがありますが、この植物もその一例でしょう。北アメリカ原産の^{きかしよくぶつ}帰化植物で、日本中あちこちで見られるほど増えたころ、この花の時期にひどい^{かふんしょう}花粉症になる人が多くいたことから、花粉症

の原因とされました。しかし花粉症の原因となるのは、スギなど、基本的には風が花粉を運ぶ植物です。軽い小さな花粉をたくさん飛ばす花なのです。セイタカアワダチソウのようにミツバチなどの昆虫が花粉を運ぶものでは、花粉も重く少量しか作らないので、風によって運ばれることは全くないとは言いませんが、その影^{えいきょう}響は極めて小さいと思います。どうやら、同じ時期に入りこんで分布を広げた^{ぬれぎぬ}ブタクサやオオブタクサなどの花粉が原因で、黄色い花がめだつセイタカアワダチソウがその濡れ衣を着せられたということのようです(それでも、原因植物だとする学者もいるようですが)。



次は、^{かき}花期が長く、11月になってもまだ咲いている花です。左はブタナ。タンポポによく似て春から咲きますが、花をつける^{くき}茎が枝分かれます。右上はヤマハギ。夏から秋、10月いっぱいには咲きますが、一株まだ咲いている木がありました。そして、右下はおなじみのセイヨウタンポポ。真冬をのぞけば、ほぼ一年中花をつけているようです(カントウタンポポは春だけ)。

まだ咲き続けているブタナ(左：キク科)、ヤマハギ(右上：マメ科)、セイヨウタンポポ(右下：キク科)



左のカタバミも、そのタイプ。春から秋まで咲き続け
ては、種子を作り繁殖はんしよくします。ハナアブの仲間や、シジ
ミチョウの仲間が盛んに花みつを吸いにきていました。

左下は、オオイヌノフグリ。早春から青い花を咲かせ
ますが、冬でも暖かい日には花を咲かせていることがあ
ります。 ホトケノザも早春から初夏の花といわれます
が、秋にも少ないが咲いているし、冬でも暖かい日には
咲くことがあります。



暖かければ冬にも咲くカタバミ(上:カタバミ科),オオイヌノフグリ(左下:ゴマノハグサ科),ホトケノザ(右下:シソ科)



最後に、時期はずれの開花、「狂い咲き」。以前にも話した
ことがあったと思いますが、季節はずれと言っても、植物た
ちは気温などまわりの環 境かんきょうに正確せいかくに反応して花を咲かせて
いるわけで、狂ってしまったのはむしろ環境や人間の活動な
ので、「狂い咲き」という言葉は適切でないと思っています。

左上は、第 50 号で紹介した桜ですが、もう満開ではない
ものの1ヶ月半近く咲いています。アリがみつをなめていま
した。その他、シモツケ (バラ科)、サツキ (ツツジ科)、オ
オジシバリ (キク科)、そして、街路樹のナンキンハゼ (ト
ウダイグサ科) が咲いていました。 【理科支援員 宮内】



季節はずれに花を咲かせた、桜(左上:バラ科)、シモツケ(左中:バラ科)、サツキ(左下:ツツジ科)、
オオジシバリ(中:キク科)、ナンキンハゼ(右トウダイグサ科)